跡なき庭に

木崎さと子

跡なき庭に

木崎さと子

文藝春秋

著者紹介

昭和十四年、旧満州新京市生れ。東京女子大学短期大学部卒。結婚と同時に渡仏し、五十四年までアメリカ、フランスに滞在。五十五年、「裸足」で第五十一回文學界新人賞を受賞。「裸足」「火炎木」「離郷」「吹き流し」「白い原」が第八十四回より連続五回の芥川賞候補となり、「青桐」で第九十二回芥川賞を受賞する。その後、「沈める寺」「波　ハーフ・ウェイ……」「幸福の谷」と話題作をたてつづけに発表している。

跡なき庭に

平成三年　六月　一日　第一刷

（定価はカバーに表示してあります）

著者　木崎さと子

発行者　豊田健次

発行所　株式会社　文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話代表（〇三）三二六五―一二一一

印刷　大日本印刷

製本　大口製本

万一、落丁乱丁のある場合はお取替致します

©Satoko Kizaki 1991 Printed in Japan ISBN 4—16—312530—2

跡なき庭に

装丁　高柳裕

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

一

みどり、と耳元で呼ばれた。低く、深い声である。肩にかぶさるように、大きな手がかかって、ゆっくりと揺すぶられる感触のなかで眼が覚めた。

うたた寝をすると風邪をひくよ。

父の声だった。机の上に父の遺したノートを拡げたまま、その上に突っ伏して、眠りに落ちていたのだ。頭をのせていた腕が痺れてきた。腋から背中にかけて、攣れたようなかるい痛みがあった。

頬にまつわりつく髪を払いながら、振り返る。スタンドの光の輪がぼんやりと壁に映り、そのなかに黒い影が浮かんでいた。振り返った影のなかから視線が発せられ、みどりに焦点を結んでいる。父の眼だ、父が見ている、と思ったとたんに、脊椎の腰のあたりから空虚感が拡がり、にぶいだるさにつながっていく。

暖炉の前にうずくまっていたタイオが、振り返ったみどりに応えるように、体を起こした。

前脚をぐっと伸ばしてから、のそのそと近寄ってくる。コリー犬特有の長い鼻筋を、みどりの顔に近づけて様子を窺うぐあいにした。

お前が起こしてくれたのね、タイオ。

首の周りのふさふさした毛を撫でてやる。

茶色の大きな毛房のような尻尾をゆっくりと振って、タイオはみどりに応えた。

父が最期の外出をした時に、タイオはこれがお別れだと予感しただろうか。オートバイで出かける父についていきたいと、吠えたてたのに許されなかったに違いない。三週間前、父はオートバイもろとも路上に転倒した状態で発見された。夜明けの凍った道でスピードを出し過ぎて、樹にぶつかったのだ。

五十歳近くになってから出来た子だからか、父はみどりのことをいつまでも幼い者のように思っていた。去年の夏休みに、この家にきて受験勉強をしたい、とみどりが言った時、「お父さんには何もできないから」と断ったのも、幼い者の面倒を自分がみなければならない、と思ったからであろう。その時の父の不安げな表情が、みどりの眼から去らない。みどりにしてみれば、東京に住む家族と別れて独りで暮らしている父の食事の世話をその間だけでもしよう、という殊勝な気持ちもあってのことだったのに。

夏休みの間だけでも一緒に暮らすことを断ったくせに、父は死んでもなお、娘が風邪をひかないように見張っているらしい。この家は隙間風など入りようもないほど閉鎖的な建物だから、多少のうたた寝ぐらいでは風邪などひきそうもない。

近くに住む父の妹の徳子は、「兄さんはやっぱり戦争を怖がっている。そうでなければ、あんなトーチカみたいな家を建てるはずがない」と言い言いしていた。みどりにはトーチカとは何のことかよく分からない。戦争を怖がるというのも、かつて日本がアメリカと戦争したという、その過去の事実に未だに脅えているというのか。たしかに父のノートには、戦争中のことがいろいろ書いてはあるけれど。

ノートに視線を戻そうとした時、青白く骨ばった男の顔がふいに眼に浮かんだ。粗い手触りの黒い布を被って、骸骨のように痩せた顔がその蔭から覗いている。

……大きな昏い眼。眼窩全体が穴になっているみたいに暗い。

脳裏に浮かんだその顔貌をまじまじとみつめてから、みどりは声をあげそうになった。この穴のような眼が、振り返ったみどりの影のなかから、こちらを凝視していたのではないか。

しかし青白い顔は、父とは異なる目鼻だちの外国人だった。子供の時に住んでいたフランスで見かけた男なのだろうか。

父は後頭部をつよく打って即死だったという。みどりはそう聞かされ、信じていたが、父の死顔に刻み込まれていた苦悶の痕は、反対のことを告げていたのではなかろうか。すぐには死ねず、誰も通らない早暁の路上で苦しみ抜いてから、息を引き取ったのではなかろうか。あんなふうに白眼を剝き、唇も歪んでいたのは、死後硬直が始まるまでに死顔を和らげる人がいなかったということだ。倒れている父を発見したのは、この辺りでは市造爺さんと呼ばれている老爺だったという。頭のすこしおかしい風来坊の爺さんだというから、すぐに適切

な手当ができなかったということだってあり得る。
それより、知らせを受けて、富士山の麓にあるD学園の寄宿舎から、御殿場線と東海道線を乗り継いでいったん東京に出て、さらに上野の駅から常磐線に乗って土浦市のはずれにあるこの家に着くまで、みどりの頭のなかで、エンドレス・テープのように廻り続けていた問いがある。ママ、パパは自殺したのよね？　そうでしょう？
みどりが着いた時には、母の彰子も異母兄の文彦もすでに来ていた。そんな非常の際でも、母はいつもと少しも変わらなかった。彫りのふかい顔をおもむろにみどりの方にむけてから、何も言わずに、片手を、もの柔らかに、しずかに動かした。悲しみ脅えている娘をなだめ、慰める仕草と、傍からは見えただろう。しかしみどりは、幼い時から母のこの手つきで、たくさんの問いを封じられてきたのだ。
もっともみどりに対しては、誰もが腫物に触るような態度しかみせなかった。後になって知ったことだが、受験期にある高校生にあまり強いショックを与えないように、という注意が徳子叔母から周囲の人々に行きわたっていたのだ。
タイオが口をきけたら、とみどりはその時に早くもコリー犬だけを腹心の友として、この一年、父を弔うことに決めた。徳子叔母の心遣いにもかかわらず、みどりは父の葬儀が終わっても学園に戻らず、一応は願書を出してあった大学の受験も片端から振ってしまった。
ねえ、タイオ。
こちらが真摯に話しかけると、タイオはじっと耳を澄まして、この世のものではない声に

聴きいるような表情になる。茶色の顔面の鼻筋と口の周囲だけが白く、黒く濡れた鼻の頭をひきたてている。

昼の間は、この家にきて、タイオとともに過ごす。夜だけは、徳子叔母のいる真脇家に泊まりにいく。本当は夜もここにいたかったが、女の子一人ではいくらタイオがいるといっても物騒だ、と言い張る叔母の意見に従ってきた。しかし、うたた寝している内に、とうとうこの家に泊まってしまったわけだ。

……うたた寝から覚ましてくれた父の声と手の感触は、現実そのもののように、はっきりとしていた。しかも脳裏に浮かぶ見知らぬ外国人の昏い眼を通して、父はみどりをみつめている。それでいて一方、白目を剝いた父の無残な死顔もありありと蘇る。

混乱した恐怖に駆られそうになったみどりは、タイオに抱きつく。コリーの長い胸毛を指先で掻きわけて、心臓を探った。犬の体温は暖かく、心臓の鼓動は確かだった。

タイオの呼吸に合わせて息をして、ようやく気持ちを鎮め、毛房から顔を上げると、暖炉に近寄った。

寒い。

父が起こしてくれなかったら、本当に風邪をひくところだった。

父は、死後もここにいる、とみどりに教えるために、声をかけ、手をかけてくれたのだ。

父の霊を慰めるためにこの家にい続けたい、などと言っても通らないだろうが、残された本類などの整理とか何とか理由をつけたいと、みどりは願っている。父の書斎には、数十冊

ものノートが遺されていた。そのほとんどは、父の専門のエレクトロニクス関係のものらしく、横文字と数式が並んでいて、みどりの興味をひきようがないものだったが、なかに数冊、縦書きの文章で埋まったノートがみつかった。難しい漢字が多い上に、父の筆跡はみどりにはひどく読みにくいが、それでも読んでみたい。それもこの家で、父の机にむかって、父の眼と手を背中に感じながら読みたい。

父のノートには戦争中の生活記録みたいなことが書いてあって、その合間に、「西洋で発達した軍隊の制度や武器に、日本人の心を闇雲に合わせようとしたのだからめちゃくちゃだ」などと感想めいたものが挟まっている。みどりには実感がわかない事柄のはずなのだが、なぜか惹き入れられるように読んでしまう。一夜ここにいてみて、叔母が言うような意味で物騒だとは感じなかった。タイオがいるのに、泥棒などが入ってくるはずもない。

ともかく独りでこの家に住んでいたければ、風邪などひいてはいられないのだ。寝こんだりしたら、徳子叔母にたちまち知れて、東京にいる母のもとに送り返されることは間違いない。

スェーターの上から、父のカーディガンを羽織った。徳子叔母が編んだチャコール・グレイの厚手のものである。編目にも毛糸そのものにも煙草のにおいが染みている。灰掻き棒をとって、暖炉の灰を掻きたてた。灰煙のなかに、紅い珠が光った。わずかに残る火種に、新聞紙を丸めて近寄せる。焦げくさい匂いをたてながら、紙はすこしずつ色を変え、ぱっと火を点す。次々と新聞紙を加えて、勢いよく炎が上がったところへ、小枝を突っ込む。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

暖炉の脇には、切り揃えた小枝が積んである。真脇家の末息子の辰志が届けてくれたものだろう。徳子の亡夫の甥に当たる青年で、みどりの父とは血縁もないのに、なにかと役に立っていてくれたらしい。切口がきれいに揃っていた。一人でいる時に暖炉を燃やしたりしないでね、と徳子叔母には言われている。火の不始末を恐れているのだ。その言い付けを守らずに、ゆうべもみどりは暖炉に火をいれたのだった。

ほんとの薪が燃やせる暖炉を、せっかくパパが作ったのに、電気やガスのストーヴなんて！　ねえ、タイオ？

片手で犬の頭を撫でながら、もう一方の手で小枝を押し込む。

小枝は生乾きだったのか薄い樹皮をぷつぷつと膨らませてから、薄青い煙を上げて燻り出した。それに構わずふいごで空気を送ると、大きな音をたてて爆ぜた。

長い鼻面を突き出して煙のにおいを嗅いでいたタイオが、いきなりくしゃみをした。

ごめんね、火を熾すのが下手で。あっちに行っててよ。

言いつつ、みどりも寝不足の乾いた眼を煙に刺されて、涙ぐむ。

窓を開けようと立ち上がると、背中や腰が痛い。机に突っ伏して居眠りしたり、床にうずくまったり、不自然な恰好をしていたせいでもあるが、中学生の時に満員電車から駅のプラットフォームに転げ落ちて腰を打ったその名残でもある。老婆のように背を屈めたまま、窓に近寄ると、ガラス戸を開き、シャッターを上げる。

外はまだ闇だと思っていたが、空はかすかに白み始めていた。隣の桑畑から、冷たい空気

がどっと流れ込んできた。
みどりは背筋を伸ばして、早暁の気を肺腑いっぱいに吸い込む。こわばっていた体のすみずみまで、鮮烈な冷気がいきわたった。体じゅうの細胞が水を含んだようだ。
十九歳の体はたちまち生気を得ると同時に、急激な眠気に襲われた。みどりは窓辺に身をもたせて、大きく欠伸をした。
欠伸に合わせたように、鳥の黒い影がするどく鳴きながら、天をわたった。
桑畑のむこうの集落のなかに、黒々とした木立に囲まれて真脇の屋敷がある。その門に立つ大欅には、夜ごとに怪鳥が訪れる、と聞かされたことがあった。今の鳥は、それだろうか。
背の低い桑の木々の黒い影が、お伽噺に出てくる小鬼のようだ。
ガラス戸を閉め、室内の明かりを消して、暖炉の傍に戻る。新しい空気に勢いを得たか、いきいきとした炎が透明な熱を放っていた。みどりは父の膝かけを取ると、肩からかけて、暖炉の前の床に座り込む。タイオが寄ってきて、みどりの脇に身を擦り寄せた。
電灯を消してしまうと、室内はまだ暗い。
起きるには早い。もうすこしお休み。
父の声が聞こえて、瞼を撫でられたようだった。タイオの背中に上体をもたせかけて、眼を閉じる。こんな恰好をしているとまた腰が痛くなるかも知れない、と思いつつ、みどりはそのまま寝込んでしまう。
ガラスを叩く音で再び眼が覚めた。

今度は父ではない。飛び起きると、室内はすっかり明るく、窓ガラスのむこうに徳子叔母の顔があった。小さな髷に結い上げた髪がふらふら揺れているのは、爪先立って額をガラスに圧しつけながら、部屋の中を覗いているからだ。

みどりは慌てて立ち上がると、腰を押えながら窓を開く。

「おはようございます」

「おはようございます、じゃないでしょ」

徳子は小さな口元を魚のように尖らせて、

「危ないじゃありませんか。シャッターも降ろさないで、女の子一人で眠ったりして、厭だわ」

済みません、とみどりは謝りかけて、別に謝るべきことでもないのに、と、

「ゆうべは閉めたんですけど、今朝早く開けたんです」

本当のことである。

「何にしたって危ないわ。ガラス戸越しに丸見えなんですもの」

徳子叔母以外の誰が、わざわざ庭に入って、覗きにくるか、と言いたかったが、そうは口に出さずに、

「ここに泊まっちゃうって、ゆうべ電話で伝言を頼んだんですけど、辰志さん、ちゃんと伝えてくださったでしょうね」

「もちろん、よ。それを聞いていなかったら、ここまで見にきたわよ。それでもゆうべは心

配でおちおち眠れなかったわ」
大袈裟な調子で言ってから、徳子は姪の顔を見上げて、
「その眼つき、彰子さんにそっくり」
みどりが母に似ている、と徳子叔母が言う時には、いい意味合いであることはない。
言われて、みどりは反射的に母の眼を思い浮かべる。内心では相手の言うことを軽んじているくせに、いかにも謙虚そうに聴いているので、眼が一瞬表情を失うのだ。
小柄な体でさらに爪先だつようにして、徳子は室内を覗き込み、
「どう？　お勉強は進んでるの？」
叔母には、まだ受験勉強をしているようなことを言ってあった。
咎める調子ではなく、機嫌をとる声に変わったのは、家の中に入りたい、という意思表示であろう。みどりにしてみれば、ここはあくまで父の家であって、自分の家だとは思っていない。父が生きていた間、何かと世話を焼きにきていたのは徳子叔母なのだから、みどりのほうこそ叔母の許可なしにこの家にいてはいけないような気がするぐらいである。
しかし、それなら、ここ以外にみどりの家と呼べるところがあるか、というと、他にはない。母の住んでいる東京のマンションにも馴染みがなかった。
東京の都心にあるカトリック系の女子学園に、みどりは幼稚園の時から通った。フランスに本部のある修道会が経営する学校なので、小学部の時に二年間父の仕事でフランスに行っていた間も学籍はそのままにしてくれて、学年が遅れることもなくて済んだのに、中学三年

の時に腰を痛めたのをきっかけに一種の登校拒否をやって、卒業は一年遅れてしまった。
ものごころついてからずっと、両親の静かだが冷やかな関係のなかで育ってきた。他人の集まりである学校という場所に出て行くのが、だんだん怖くなってきた原因の一つには、それもあったに違いない。そのころから両親の不和が決定的になったのだろう、それまで住んでいた家を売って、東京のマンションと茨城県の田舎にそれぞれ住まいを分けることにしたのだ。みどりはそれを機会に、高等部からは富士山麓にある同じ学園の地方校に転校して、寄宿生になった。
父につくか母につくか、といった迷いに悩んだというほどではない。一年遅れてみて、ますます東京の学校に通うのが厭になってしまったというだけのことだ。学校に行こうとすると頭が痛くなるとか気持ちが悪くなるとかいった、本格的な病気としての登校拒否だったわけではない。転倒して腰を痛める原因となった満員電車に乗るのが怖いというのを意識的に理由にしたぐらいだから、本当の登校拒否児からみたら甘い状態だったのだ。
その高校もこの三月には卒業して、寄宿生の身分を失ってしまうから、どこか住まう場所は必要である。それなら、ここに、というみどりの気持ちを察しているのかどうか、徳子は徳子なりに、兄のいたこの家にさまざまな想いが残っている様子だった。
玄関に廻って錠を外すと、待ちかねていたように徳子は入ってきた。秋から春にかけて徳子はほとんど和服で通している。こんな田舎でも、よほど高齢の老女をのぞいては、ふだんも和服を着ている女性はまず見かけない。身についた着物姿に気取りはなく、みどりも、そ

の点ではこの叔母のことを好いている。

上半身をくるむように肩からかけていた暗緑色のショールを外すと、徳子はちらと書斎のほうを見た。父は生前、書斎には誰もいれなかった。たまに遊びにくるみどりだけが例外で、それも父からみれば、みどりは他人というには幼すぎたからだろう。父が亡くなった今、それも母がこの家に近づかない以上、徳子が書斎に入ることを咎める者はいない。それなのに徳子はなにものかを恐れるような表情で、視線をそらせ、そのまま居間に通った。

居間の一隅に小机を置き、白布をかけて、父の写真が飾ってある。遺骨は近くの慈光寺で預かって貰っている。整った表情ではあるが、眼鏡が光っているせいか冷たく見えて、みどりが好きな写真ではない。徳子叔母が自分のもっていた写真のなかから、文彦と相談しながら選んだ写真だった。これが裕策兄さんらしくて立派だわ、という徳子の声に続いて、彰子さんやみどりちゃんの意見も聞いたほうがいいんじゃないでしょうか、と文彦が言っている声が聞こえたのを、みどりは覚えている。文彦は継母にあたる彰子のことを、名前で呼んでいる。年齢が近過ぎる上に一緒に住んだことはないので、母とは思えないのだろう。異母妹のみどりとの間はいっそう疎遠だった。

いつもの通りにまず写真の前で合掌してから、徳子は供えてある水仙のむきをちょっと変えた。叔母の肩越しにみどりは父の写真を眺め、黒い布を被った男の顔を思い出そうとする。明け方に見てすぐに忘れてしまう夢のなかの人物のように、男の顔はみどりの脳裏から消えてしまっていた。みどりは妙にあの顔が気になって、手掛かりを探すために、昏い眼・穴み

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com